
フランスにて

tensuke

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フランスにて

【著者名】

N5131C

【作者名】

tensuke

【あらすじ】

俳優結城聰史が訪れたフランスの田舎町で出会った不思議な青年
フランス夢か真か幻か切ない恋物語です

(前書き)

俳優玉木宏さんをイメージして書いています
気分を害されそうな方は「遠慮下さい

1・口ケ

俳優 結城聰史 27歳 ミネラルウォーターのCM撮影の為にフランスを訪れていた。

久しぶりの海外、仕事とはいへ 美しい国に聰史は心躍らせていた。ドラマや映画の撮影が一段落し、この口ケは比較的のんびりとした日程である。

聰史は持参したカメラを手に 撮影の合間に自然に恵まれた美しい景色や地元の良い人たちをファインダーに収めていた。

撮影の予定は「良く晴れた日に」というコンテでシナリオができていた。

しかし 撮影2日目からあいにくの雨模様になってしまった。

口ケは中止となり、聰史は思いがけないオフを手に入れた。

日本を離れ、彼を見知る人の目もない異国之地

聰史は久しぶりにのびのびと 人目を気にする事なく過ごせる時間を手に入れた。

スタッフに明日からの予定を確認し、

聰史は一人丸々一日あいた自由な時間を単独行動の日と決めた。家族への土産物を買いにいこう。

自分のための何か記念になる品も搜せたらいい。

何もなくても ただ 一人ふらりと自由に過ごせたらいい。雨空ではあったが 聰史の心はわくわくと躍っていた。

滞在していたホテルはパリの市街地からは遠く離れた

ミネラルウォーターの源泉にほど近い 緑豊かな美しい田舎町だった。

公共の交通機関はバスと長距離を行く列車だけ。

町の人々はのんびりと暮らしていた。

傘とカメラ そしてポケットに収まるだけの身の回りの品 そんな軽装で 聰史はホテルを出た。

どこへ行くあてもなく ただ 良い景色を求めて歩き出した。

ほどなく小さなバス停を見つけた。

近づいてくるバスも見えた。

聰史はふとバスに乗つてみたい衝動にかられ、
バス停にいた2~3人の乗客にまぎれ車中の人となつた。

料金は行き先に到着した時に払うシステムらしい。

聰史は運転手の反対側最前列に座つた

聰史は灰色の空から静かに落ちる雨を車窓から眺めていた。

雨は緑を濡らし 窓から見える郊外ならではの景色は美しかった。

聰史は時折シャツターを切つた。

「・・日本人・・ですか？」

聰史の斜め後ろから 日本語で話しかけてくる者がいた。
振り向くと 聰史と同年代か もう少し上の年齢だろうか
白いシャツの青年だつた。

2・迷子

「・・・あ・・はい そうです」聰史は応えた
「観光ですか?」

青年は聰史を俳優としての認識がないらしい。

屈託なく 笑顔で話しかけてくる。

青年は一見したところ日本人には見えない。

亞麻色の柔らかそうな髪 薄いブラウンの瞳に長い睫
陶磁器のような白い肌をしている。

嫌味のないハンサムな顔立ちである。

ハーフなのか 全くの西洋人なのか 聰史は思いあぐねた。

「・・・いや 仕事で」

聰史は 青年の無邪気な笑顔につられて 正直に応えた
「そうですか！こんな田舎にお仕事なんて珍しいですね！」

青年は流暢な日本語で続ける。

「僕はフランスと言います 父がドイツ人で母が日本人でした」

「・・・あ・・・そう・・・」

聰史のちょっと戸惑つた返答におかまないなしにフランスと名乗った青年は続けた。

「日本に住んでいた事もあるんですね！小さい頃ですけど

「・・・日本語 上手ですね」

聰史は青年にどう接するべきか正直困惑し始めていた

自由気ままな一日のはずが 日本でファンに取り囮まれる困惑とは
違うが

この青年の人懐こいといえば聞こえのよい

ちょっと遠慮のない馴れ馴れしさに困惑していた

「僕はフランスです 貴方は何というお名前ですか？」

フランスは笑顔で聰史に握手を求めてきた

「・・あ・・・僕は・・ゆうきさん といいます」

聰史はとりあえず握手に応えた

「さとしさん 今日はどこまで行くのですか? このバスは住宅街しか

回りませんよ 市場とか観光できる場所 行くななら次で降りて

乗り換えた方がいいデス」

「・・あつそなんだ ありがとづ」

微笑むフランツにつられて微笑んだ

「僕はこれから市場へ行きます 一緒に行きますか?」

「えつ?」

フランツは相変わらず無邪気な笑顔のままである

何か企んでいるとか「盗賊」という雰囲気でもない(笑)

「あ・・(笑) そうですね ジヤア ゴー緒します」

聰史はどうせ気ままな休日のこと 何の予定があつた訳でもなく偶然声をかけてきた 人懐こい青年と一緒にでかけて見ることにした

フランツは次の停留所で聰史をつながしバスを降りた
二人分の料金をさりげなく運転手に支払ってくれた
スマートで嫌味のない仕草が紳士らしく見える

「あ・・俺の分のバス代 エツト・・いくらかな・・
ズボンのポケットから小銭を取り出しながら聰史が聞くと
フランツはにつこりと笑つて手で制した

「後でいいですよ」

そういうつて フランツは前を歩き出した
バスに乗っている時は氣づかなかつたが 歩き出すと
フランツの方が聰史より頭半分ほど背が高かつた
すらりとした長身に小さな彫りの深い端正な顔がのつている
(日本にいたら モデルにでもスカウトされるのだろうなあ)
聰史はぼんやりとそんな事を思いながら 後ろからついて行つた

「エニコは農家から直接やつてくる素敵な果物と野菜がいっぱい」

フランスはテントがならぶ市場らしい所へ聰史を案内した

「おお～つ うまそだなあ～」

聰史は山積みのオレンジやプラム 葡萄などのフルーツの甘い香りに顔がほころんだ

市場の人たちは皆 人の良さそうな いかにも農家の
おじちゃんやおばちゃん といった風貌だ

聰史は カメラを取り出し 果物の山や 店の人たちの笑顔にシャツターを切った

フランスはそんな聰史をにこにこと見つめている

「聰史さん お腹がすきませんか？」

フランスの声に あちこちカメラ越しに眺め続けていた聰史は
ようやく我にかえった

「ああっ・・確かに」

いつの間に買い物をしたのか フランスは大きな紙袋を抱えていた
「僕の家 すぐ近くです よかつたらお昼食てしまよう」

「え・・いや・・それはちょっと・・・」

「時間 ないデスか?」 フランスは相変わらずの笑顔である

「いや・・時間はあるけど 会つたばかりの貴方にそんな迷惑は・・

「迷惑! ありません ありません」

フランスは大袈裟に手を横に振つて見せた

「僕は怪しいヒトではありませんよ 安心して下さい(笑)」

「いや・・・(苦笑) でも」

「いきましょう!」

フランスは困つている聰史にお構いなしに

聰史の腕を掴んでずんずん歩きはじめた

「いや・・あの・・俺は・・あの」

しどろもどろの聰史の声を聞いているのかいないのか

鼻歌まじりの笑顔でフランスは歩みをとめない

市場の喧騒から離れ 静かな住宅街の一角でフランスが止まった
「どうぞ お入り下さい」につっこり微笑んでドアを開けた
趣味の良い植栽に囲まれた 小さな一軒家だった
どうにでもなれ とばかり覚悟を決めた聰史は
フランスについて家にはいった

3・哀愁

家のの中も 品の良い調度品で整えられた
居心地の良さそうな いざっぱりとした様子だった
マントルピースの上には黒髪の美しい女性の写真が飾つてあった
ふと足元に暖かいモノを感じて聰史はびくつとした
見ると 聰史の足に身体をすりよせるように
大きな黒い固まりがいた

「……？」聰史はそれが何なのか判らず一瞬恐怖に固まった

「ジョス！お客様だよ」フランスの声にその黒いモノが顔をあげた
むくむくの毛並みの中型犬だった

「バフツ」

鼻息と共に聰史の両足の間を無理矢理ぐぐり抜けて
ジョスと呼ばれたそのむく犬はフランスの声のする方へゅっくりと
歩いていった

「聰史さん 食べられないモノありますか？」

フランスはキッチンにいるらしい 声はするが姿が見えない
「いや……特に」聰史は初対面のフランスに

自分の「まじまとある好き嫌いを説明するのが億劫だった

フランスはキッチンからお茶のセットをお盆に乗せて出てきた
聰史を庭に面したテラスへうながし 椅子をすすめた
居心地のよい よく手入れの行き届いた庭の見えるテラスだった
名前の判らない可愛い花たちが沢山咲いていた
聰史はいつしか フランスという青年に抱いていた警戒心をほどい
ていた

フランスの用意してくれたランチは聰史の食べられるモノばかり
それも好物に近いものばかりだった
凝った料理ではなかつたが どれも丁寧に仕込まれたものである事が
料理には若干の知識のある聰史にはよく判つた

フランスは食事の間も たえず聰史に話しかけ

その内容も 聰史と同年代を思わせる気安さで 心地よかつた
聰史を飽きさせる事なく フランスのもてなしは何処までも
心配りの行き届いた まるで最高級のホテルで専属の執事が
それも友人を兼ねてくれそうな執事が

つきつきりで世話をやいてくれているような感覚に襲われた
初対面の見ず知らずの人間の家で ゆつたりくつろいでいる自分に
聰史は少なからず驚いていた

どの位の時間がたつたのだろうか テラスに差す日差しはまだ明るい
聰史はふとフランスが聰史の事 日本の事 またフランスについての
他愛のない話はするものの 自分について何一つ語らない事に気づ
いた

「・・・フランスは・・一人でここで暮らしているんですか?」

聰史はようやくフランスに質問を取り付けた

「はい そうデス ジョスと一人です」 フランスは笑顔で応える

「・・フランスは・・今 何歳ですか?」

「はい 今年30歳になりました ジョスは6歳です」

「・・えつと・・ご家族とか・・は?」

「ジョスと一人デス」 フランツは聰史にっこりと微笑んだ

聰史はふと自分がまるで腕の悪い警官が職務質問でもしているような
バツの悪さを感じ 苦笑した

フランツにまるで気にしている様子はなかつた
変わらず 笑顔で 聰史の空になつたカップに静かにお茶を注いで
くれた

日が傾いてきた

テラスがうつすらと影に入り 草の影から虫の声が聞こえてきた
聰史は自分が思いの外 この青年の家に長居していたことに気づいた
「あつ！なんだか ごめんなさいつ すつかりお邪魔して・・」
慌てて退居を申し出る聰史にフランツは変わらぬ笑顔で言つた
「聰史さん よかつたら今夜は泊まつていませんか？」

「・・・えつ？」

さすがに聰史もその言葉にはぎょっとした表情になつてしまつた
なぜ 異国の方で初対面の見ず知らずの知り合つたばかりの青年に
家に泊まつてゆけとまで誘われる？

その成り行きにふと不安な面持ちになる

「ワタシは 怪しいヒトではありません」 どこまでも笑顔のフランツ
こうなると この笑顔 자체がかなり怪しく思えてくる

(若い邦人女性 現地郊外で遺体で発見される)

聰史の脳裏にふとそんな新聞記事の見出しが浮かんだ

(・・・つて 僕 女じやないし・・)

(いや・・それでも 臓器売買とか・・)

聰史の脳裏には次々と物騒な思いが走り回つた

「いや・・フランツ ありがたいけど もうこれで失礼するよ」

聰史がそういうて椅子から立ち上ると むく犬のジョスが
悲しげに鼻をならしながら聰史の足元にすり寄つてきた

ジヨスの背中をなでながら ふとフランスを見た聰史は驚いた

今まで 常に笑顔だつたフランスの無邪気な顔が

暗く 悲しく 寂しそうに陰つていた

見る者をやりきれなくさせる表情だった

「・・・そう・・ですか・・残念です」

フランスは消え入りそうな声でつぶやいた

聰史はまるで自分が極悪非道な悪人にでもなつた気分になつた
一瞬 フランスに抱いた疑惑や恐怖は一気に失せていた

テラスはすっかり日がかけり

椅子に腰掛けたフランスを暗く より一層悲しげに影に包んでいた

聰史はしばらくフランスを見つめていた

（スタッフには電話でもいれればいいか・・・）

聰史はフランスの肩に手をかけて言った

「（迷惑でなかつたら おことばに甘えて一泊・・・

「そうですか！ よかつたよかつた ありがとう！」

聰史が全てを言い終わらないうちに

フランスは椅子から飛び上がるように立ち上がり

極上の笑顔で聰史の両手をとつてうれしそうに言った

「いや・・まあ・・」

（このフランスって・・一体何者なんだ・？）

未だ一抹の不安と疑問は残つたが

フランスが凶悪な殺人者にも強盗にも見えず

聰史は居心地の良い フランスの家に一泊することを決めた

久しぶりに窮屈な日本を離れて

聰史の心中にもどこか 普段と違う何かを求める気持ちがあつた
のかもしれない

また 確かに立ち去りがたくなる程に フランスの家は心地よかつた

すっかり日が落ち 外が暗くなると

フランスはまたも手際よく短時間で素晴らしい夕食を用意してくれた
足元にジョスが座り 二人はゆつたりとした時間を楽しんだ
この頃には 聰史はフランスになぜか昔から見知っているような
友人のような親しみを覚え始めていた

フランスの話は面白く 知的で刺激的だつた

二人の間に話題はつきることなく 夜半まで語り合つていた

4・想い出

夕食の後 リビングの毛足の長いカーペットに座り
フランスがあけてくれた少し甘いワインを飲んだ
ジョスが二人の近くに寝そべり

明かりはほの暗く 日本の蛍光灯だけの住居とは趣を異なつた
ここちよい夜風とうまいワイン

話の楽しい 新しい友人

聰史は上機嫌だった

(ちょっと位冒険してみるもんだよな 子供じゃないし・・)

思いがけず 良い友人を得る事ができた

そんな風にまで思うようになつていた

二人は昔ながらの友人のように語り合い 笑いあつていた

「あ・・フランス！悪いけど電話を貸してもらえないかな
仕事の仲間に連絡をしておかないと心配をかけてしまうから」
聰史はすっかりスタッフの事を忘れていた

フランスはちょっと申し訳なさそうに応えていった

「聰史さん 「ごめんなさい 僕の家には電話がありません
「えつ！」

聰史は一瞬 心底しまつた と思つた

スタッフへの連絡だけ なんとしてでもしておくべきだつた

しかし 今となつてはどうしようもない

聰史は覚悟を決めた 明日 朝一で戻ればなんとかなる

そう 自分でも無理矢理思いこむ事にした

そんな大切な事も すっかり忘れる程

フランスとの会話は楽しく 日常を離れた解放感に満ちていた
ほろ酔い気分で聰史の白い頬はつづらとピンク色に染まっていた
目元もほんのり赤らみ 黒い瞳がうるうると光っていた

フランスはいたつて変わった様子もなく

相変わらずの 人好きのする無邪氣な笑顔であつた

「そろそろ 聰史さん眠いですか？」 フランスの声がぼんやり聞こ
えた

ジヨスの柔らかい毛並みがこちよく頬を撫でている
聰史はカーペットの上にクッショնを枕にしてうとうと微睡んで
いた

「聰史さん？ ベッドもちゃんとありますデスよ」

フランスの耳さわりのよい柔らかい日本語が遠く聞こえる

聰史はそのまま 睡魔にさらわれた

5・夢

聰史はひんやり心地よい感触を頬に感じた

それは柔らかく聰史の頬を撫でる

ぼんやりと開いた聰史の目にうつったのは

亞麻色の髪の美女

美女は柔らかくカールした前髪の隙間から
茶色く光る綺麗な瞳で聰史を見つめている

白い手が聰史の頬を撫でていた

愛おしそうに 慈しむように そつと頬を包む

「・・・んっ？だれ・・・？」

聰史は夢見心地の中つぶやいた

美女は微笑むだけだつた

聰史は睡魔の耐え難い誘いに打ち勝てず

再び眠りの淵に沈んで行つた

聰史の傍らに跪き その頬を優しく撫でていたのは
フランスだった

フランスは聰史の寝顔をじっと覗き込んでいる

「・・・美奈子・・・」フランスがつぶやく

聰史のふつくらと厚みのある柔らかそうな唇は
紅く色づきまるで口づけを待つかのようにほのかに開いている

「・・・美奈子・・・」

再び そうつぶやいて フランスはゆっくりと聰史に口づけた

「・・・んっ・・・」聰史が小さなため息をついた

フランスは聰史の頬を優しく撫でながら

今度は幾分 情熱的なキスで聰史の唇を塞いだ

まどろみの中 聰史は心地よいキスの感触に酔つていた

亞麻色の髪の美女がまとわりついてくる

情熱的なキスをふらせてくる

そんな夢の中に聰史はいた

美女の手によつて シャツの襟元がゆるめられていいく
ボタンが外され ゆっくりシャツが脱がされてゆく

部屋の空気は肌に心地よく

なにより 胸に降ってきた美女の唇の感触が柔らかい
雲の上で天使に触れられているような

聰史はそんな気分だつた

しかし やすがに聰史も その美女の唇に
胸の敏感な突起を弄ばれ

ひんやりとした手の感触が自分の股間に及んだ時
心地よい夢のまどろみから引き戻された

「・・・！」

まだ眠りから完全に覚めきらない身体は
意識に反して 思つようには動かない
もどかしいほどに手足の指先すら動かない

聰史は自分に覆い被さるよう口づけをしているのが
フランスである事によつやく気づいた

「・・・！ フランス！ ！」

聰史は叫んだ 叫んだつもりだった しかし声がない
意識はしつかりあるものの

金縛りにあつたように身動きができない
いつどうやって運ばれたのか 聰史は広いベッドに横たわつていた
状況が把握できず 覚醒し始めた聰史の意識は混乱していた

フランスはこの世で一番愛しい人に触れるように

至福の表情で聰史に口づけている

（・・なつ！・・なんだつ！なんなんだついつたい・・）

聰史は狼狽えた

しかし相変わらず身体の自由はない
フランスに触れられている感触はあるものの

指先一つ思つように動かせない

（ど・・ど・・どうなつてんだ おいつ・やめつ・やめろつ・
頭の中なか心の中なか
聰史はわめき続けていた

「みーな・・やつとこうして君に触れる事ができる・・」

(・・?みーな??なんだ? フランツ? 誰のこと? ってんだ?)

聴史の動搖に気づく様子もなく フランツの熱い抱擁が続く

(えーーーいつーいつーかげんにしてくれつ! やめつ! おいつーーー)

いよいよ聴史は慌ててきた このままではどうなつてしまつか

想像したくもない

(ふらんつうううつ! ! ! !)

フランツの指先が聴史の敏感な箇所を優しく愛撫し始める
背中に電気が走るような 男に弄ばれているという嫌悪感と
それに反して身体が反応してしまつ

痺れるような快感

(うつ おおおお~いつ! やめんかああ~つ! あつ・・・)

嫌悪の限りに聴史の心が叫んだ瞬間

聴史はふと何かに押し出されるような感覚に驚いた

その次の瞬間 今まで聴史を襲っていた

めぐるめぐ快感の波が消え その代わりになんとも頼りない
浮遊感に襲われた

(・・・えつ?)

自分に何が起きたのか判らなかつた

目の前にベッドがあつた

ベッドの上にはフランツがいた

そして そのフランツは誰かを一心に愛おしそう抱きしめている

(・・?)

聴史は目をじらし状況を把握しようと必死だつた

その聴史の目に映つたのは

フランツに抱かれ 愛撫され 快感に震えのけぞる自分の姿だつた

(・・・! はあつ~? ?)

状況が理解できなかつた

フランスは確かに聰史を抱いていた
しかし 聰史にその感触や感覚はない

ただ 果然とその光景をベッドの横に立ちつくして眺めている
(・・・俺は・・・一体どうなつているんだ??)

聰史は思わず自分の手足を動かしてじっくり眺めてみた
(・・・す・・・透けてる?)

ちゃんと洋服も着ている 手足も思つように動く しかし
ベッドの横に立ちつくす聰史は実体をもたない存在だった
(・・・俺の身体・・・)

フランスの白い背中越しに見える自分の顔
鏡で見慣れた自分の顔

黒く少し長い前髪が乱れて額に散つている
大きな瞳 長い睫 ほんのり紅いぽつてりと厚い唇
確かに自分の顔

それが今 目の前で自分の意識とは別の表情を浮かべている
ほぼ全裸に近く 衣服を乱れさせ フランスに抱きしめられている
快感に身を任せ フランスの愛撫を全身に受けながら
白い手足をからめあつてている

(・・・俺?)

「みな・・・やつといつして一つになれる」

フランスのセセやきが聞こえる

それに応えるように フランスに抱かれている聰史がつぶやいた
「フランス・・愛してる」

(・・・!俺の声じゃないつ!!)

それは聰史の声ではなかつた

そして一瞬 聰史の顔ではない美しい黒い瞳の女性が
重なつて見えた気がした

(・・・あれは・・・マントルピースの上にあつた写真のひと・・・)
フランシとベッドの上の聰史は熱く長くお互いをむさぼるような
口づけに夢中であった

(・・・な・・なにつ？？)

聰史は戦慄した

何者かに自分の肉体を乗っ取られている
そんなことが現実にあるものか

きつと夢に違いない

そうだ これは夢に違いない

目が覚めれば 何事もなく 朝日がまぶしいいつも朝

そうだ これは夢に違いない

ソウダ コレハコメニチガイナイ・・・・・・

恐怖とも焦燥とも嫌悪とも悪夢とも・・・・

聰史は得も言わぬ心持ちで それでも目の前の光景から
なぜか目が離せずにいた

目の前の聰史の肉体は先ほど一瞬かいま見た

美しい女性の顔ではなく 今はやはりどう見ても聰史

そしてその身体は 細いながらもバランス良く綺麗な筋肉に覆われた

腕のつけ根などはがつちりと太い

どう見ても立派な成人男性のそれである

自分で自分を眺めるとは・・・

鏡を見るのとは違う

何せ 自分の意志とも全く異なる

感覚えない動きと表情をしている自分

何とも不思議な気分であった

フランシは愛おしそうに聰史の両足のつけ根に口を寄せ

聰史を優しくその口に含み 吸い上げている
ベッドの聰史は 眉間に少し皺を寄せ
固く瞳を閉じて迫り来る快感に耐えている
その両手がフランスの肩を掴み 爪の後を残す
汗がひかっている

男二人の濡れ場 しかも一人は自分

(・・・・・・・・・・・・・・・・・・)

肉体から押し出された聰史の意識は困惑しきっていた

(・・・・・・お・・・・・お・・・・・俺は・・・いつたいどうな
つて・・・・・)

激しくお互いを求め合っているベッドの一人
愛し合う恋人のそれとしか見えない

時折 聰史の口からかすかな吐息や甘いため息がもれる

(・・・・・・い・・・・いろっぽいやないか・・・・・・)

赤面する聰史の意識

(・・・・・じ・・・こんな悪夢は・・最悪の悪夢だ・・・・・)

夢なら早く覚めて欲しい

といつか・・・夢でもこんなふうに 自分が男に抱かれる所など
見たくもなかつた

そんな聰史の意識をよそに ベッドの二人の行為は
いよいよ激しくなつていく
お互いの唇を激しく重ね 舌をさぐり合い求め合つ
フランスはついには聰史の両足を肩にかけ
その引き締まつた形の良い小さな臀部で
花の蕾のように固く閉じた その部分に
自身の熱くたきつた欲望を突き立てようとしている

(「ひひひひひひひわあ・あ・あ・あ……やめつーやめつー
うおおおーこつーー）

聰史の意識は必死にフランスを引きはがそうとベッドに猛進する

しかし その手はむなしく空を切り フランスにさわれない
いよいよ自分が男に犯されてしまつ

しかもその自分たるや快感に震えて
受け入れ体制万全の表情！

（俺じやないよお～ ゼッたい俺じやない（涙）

聰史の意識は泣きたい程に情けなかつた

その時

ベッドのフランスがふと顔をこちらに向けた

（・・えつ？）

ベッドの傍らになすすべもなく立ちつくす実体のない聰史の意識
その聰史と ベッドの上のフランス
二人の視線がしつかりと交わつた

（・・えつ？）

聰史はフランスが自分を見ている事に気づき驚いた

（・・えつ？見えるのか？？）

フランスはベッドの聰史に優しくそつと自身の挿入を試みながら
視線を外さず はつきりと言つた

「・・・聰史サン・・ゴメンナサイ・・でも やつと美奈子と
結ばれる事ができました ありがとう

どうか 最後まで いかせてください ジのまま あと少しダケ」
そういうつて フランスは視線をそらし ベッドの聰史に覆い被さつ
ていつた

（・・・・・つはああああつ～？？）

自身の操が奪われる

感覚のないまま 自分の意志に反して といつよりも
意志を押し出されて男に抱かれている自分
しかも「やつと美奈子と結ばれる」とはどういう意味だ
（な・・なんで 僕？？俺なんだよ？？）

自分のあられもない姿を目の前に 気が狂いそうだった

いくら相手がハンサムな西洋人だつて

いくらビジュアル的にはありかなあ・・な光景だつて
いくらなんでも これはあまりにも情けない

しかも自分はヤラれる方かよ・・・

あんなによがらねえよ・・俺は・・・

あんな・・あんな いやらしい顔しねえよつー俺はつ！
あ・・あんな・・い・・色っぽい・・顔なの・・?俺・・・

段々 聰史は肉体はないのに 立つていられなくなり
ベッドに背をむけて座り込んでしまった

どの位たつただろうか

相変わらず 見つめる自分の抱え込んだ膝小僧や

両手の指は透けているし なんだかふわふわしてたよりない
失った自身の肉体にはもう一度と戻れないのだろうか
そんな不安にかられ始めた頃

押し出された時と同じように

今度もまた突然に 腕引き寄せられるように
どこかに押し込まれる感覚に襲われた

その一瞬の後

聰史は自分がベッドの上にいる事に気づいた

しつかりと背中にはしつとりと汗ばんだらしいシーツの感触がある
そして何より 自分の胸の上にある重み

目の前に迫るフランスの顔

(・・・・・へつー！)

聰史は大きく目を見開いた

「げつ？？？」

声が出た

が その声はフランスの柔らかい唇に遮られた

優しく 軽く 唇の表面が何回か触れ合つ心地よいキスだった

「・・・」

一時 聰史の思考回路は真っ白だった
今までの出来事
さつきまで自分が目撃した出来事
そして 今のキス
どれも理解不能 予測範疇を大きく超えた「想定外」の出来事だった
何も言えず ただただ 目の前のフランスの笑顔をぼんやり眺めて
いた

7・夜明け

フランスは聰史を胸に抱きしめたまま ゆっくりと話し始めた
それは フランスの初恋だった
相手はフランスの母の歳の離れた妹
フランスの伯母だった
黒髪と黒い瞳の美しい 色の白い女性だった
名前を美奈子といった
美奈子は人妻だった

何よりフランスとは実の伯母と甥である
お互に想いあつてゐる事が判つても
叶わぬ恋であつた

美奈子は愛のない結婚に悩み
子供にも恵まれず
一人孤独の中 精神を病み 寂しく短い生涯を閉じた
フランスにはどうにもできなかつた
想い出の多すぎる日本を離れ フランスはこの国に移り住んだ
それでも 一時でも美奈子の事を忘れた事はなかつた

街で見かける日本人にその面影を捜した

そして 聰史に声をかけた

そんな話だった

「・・・聰史さんを一目見た時に なんて美しいヒトだらうと思いました」

フランスは聰史の髪を優しく撫でながら言つた

なぜかフランスを突き放す事も その腕から逃れる事もできず

聰史は彼の話を黙つて聞いていた

「聰史さんは 美奈子にとても良く似ていました」

フランスは続けた

「美奈子も このヒトならきっと許してくれる僕に囁きました」

「・・・？」

聰史はよく意味が判らないといった顔をした

フランスは聰史の無言の疑問に答えるように続けた

「本当の女性なら 今まで何人か美しい日本人のヒト
みかけました でも 美奈子は本当の女性の身体で
僕が想いを擧げるのを嫌がりました」

「・・・？」

「美しい 聰史さんに巡り会えたコトはシアワセでした」

「・・・？」

「これで 思い残すコトは何もありません ありがとう 聰史さん」

「・・・？」

複雑な とても理解できない 何と応えて良いのか判らない

ただただ果然とフランスの腕の中に聰史は居た

「これで・・・何も未練はアリマセン」

フランスはそういうて もう一度聰史にキスをした

熱く情熱的なキスだった

舌をからませ 強く吸われるうちに聰史の意識が遠のいた

「・・・夢・・・だよな・・・どうせ・・・」

どこか もう投げやりな やけっぱちな気分だつた
早く朝日によらされて 目を覚ましたい そう思つていた
薄れていく意識の中で 静かなフランツの声を聴いた気がした
「・・ありがとう 聰史サン サよなら」
フランツの笑顔を見た氣もした
深い漆黒の眠りに落ちていった

8 . 帰還

「結城さんっ！ 結城さんっ！ 大丈夫ですかっ？」
誰かに肩をゆすられて目が覚めた

「・・・んっ？」

目を開けると見慣れたスタッフの顔があつた

「・・・あれ？俺・・・」

「結城さん雨の中散歩にでかけたまま戻らないから
心配してみんなで探しに出たんですよ
こんな所で居眠りしちゃって風邪ひいたら大変ですよ
「・・・えっ？」

すっかり覚醒した聰史が辺りを見回すと

そこはどこか古ぼけた長いこと使われていなかつたらしい
小さな民家の軒先にあるベンチの上であつた
庭には雑草が生い茂り 家の外壁はツタで覆われている
うち捨てられた 半ば風化しかけた犬のリードがあつた
「・・・ジヨス？」

「どうやってこんな所まで来たんですか？ 結城さん
随分搜したんですよ」

「・・あ・・今 何時？ いやつ・・何日？」

スタッフの応えた日時は 聰史がホテルを出たその日の

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5131c/>

フランスにて

2011年1月19日22時27分発行